

吉祥寺と井の頭公園から生まれたフリーペーパー

PARKS

パークス

ご自由にお持ち帰りください。

祝!
vol.1

じかん／ばしょ／ひと

トクマルシューゴ・インタビュー

吉祥寺だけが住みたい街でした マキヒロチ

IN CINEMA, IN KICHIJOJI 高田 漣

吉祥寺の裏方たち——らんかんスタジオ・鈴木育男インタビュー

映画をつくっています。





吉祥寺と井の頭公園から生まれた映画

PARKS パークス

ついに撮影が始まりました!



撮影初日(5月11日)朝。左から2番目が瀬田監督。写真: 数下雷太

3月31日の製作発表の当日、実は撮影も始まっていました。本格的な撮影開始は5月11日だったのですが、そのころはすでに新緑の季節。井の頭公園の映画である以上、何をおいても桜のシーンをという、企画者の本田拓夫さんの意向もあり、1日だけの特別な撮影が行われました。ほぼ満開の桜の中を主人公が自転車で駆け抜けます。ただそれだけのことにドキドキする。これまでの映画で誰も見たこともない桜のシーンになるかもしれません。

そしてアトレ吉祥寺店ゆらぎの広場では製作発表記者会見が。この日の1年以上前から準備が進んでいた本作の、ようやくの公式発表でした。こちらの会場にも、まるでこの日を待っていたかのように桜の木がしつらえられ(もちろんこの記者会見のための設営ではないのですが)、満開の桜の木の下での発表となりました。パウス

瀬田なつき監督作品 音楽監修トクマルシューゴ 2017年春 テアトル新宿他にて全国公開

製作:本田プロモーション BAUS 製作プロダクション:オフィス・シロウズ
配給:boid 宣伝:VALERIA

父や祖母が60年代に残した1本のオープンリールテープ。そこに収録された未完成の音楽が、若者たちの手によって半世紀後に蘇る。それはかつてあった音楽でもあり今ここにある音楽でもあり、来るべき未来の音楽でもある。吉祥寺と井の頭公園を舞台に、あらゆる時代に鳴り響く音楽を、現在の若者たちとかつての若者たちが作り上げる、音楽青春映画。



製作発表記者会見。左から樋口泰人、トクマルシューゴ、瀬田なつき、本田拓夫、松田広子 写真:Maciej Komorowski

シアターを閉館して、しかし映画と井の頭公園への思いを何とか形にしたいという本田さんの意思や、単なる面白い映画と言うことだけではない、多くの人の思い出や希望が重なり合っってひとつの公園になった

ような映画を、という製作チームの意図が語られました。この時点でシナリオはまだ確定しておらず。本格撮影直前まで、監督は頭を悩ますことになりました。

5月10日は本格撮影前の安全祈願のお祓いをしました。もちろん井の頭公園の弁天様。スタッフ、キャストが一堂に会しておの祈い。あの可愛いお堂から

は想像もつかない地鳴りのようなお経と公園中に鳴り響いたはずの豪快な太鼓の音に、何かの扉が開かれた、そんな感じを全身で受け取りました。

お祓いが効いたのか、とにかく撮影は

好天に恵まれています。公園や吉祥寺の各所で撮影風景を見かけた方も多いかもしれません。桜の下の撮影と同様、主人公が自転車で駆け抜けます。3週間ほどの撮影はあっという間に終わり、これから編集やダビング作業を重ね、完成は10月予定。無事の完成を祈っててください!



井の頭公園弁天様でのお祓い。 写真:Maciej Komorowski

じかん
ばしょ
ひと

No.01

吉祥寺は 映画館の ある街、だった

トクマルシューゴ
インタビュ―

聞き手：樋口泰人

『PARKS』の音楽監修をお願いしたトクマルシューゴさん。公園の映画、音楽を作る映画という漠然とした目的があるだけで、その他はほとんど決まっていないうまくない状態から、映画作りに関わっていただきました。それは、いくつもの小さな音が重なり合って、大きなひとつの音楽を作り上げていくトクマルさんの音楽のようにこの映画もありたい、という監督の願いでもありました。

樋口泰人(以下、樋口)：制作発表の時も「子供の時から吉祥寺によく行っていた」という話をされてましたが、実際の生まれ育ちはどちらになりますか？

トクマルシューゴ(以下、トクマル)：吉祥寺ではないんですけどね。映画を観に行くとかそういうことがあれば、絶対に吉祥寺に行っていました。一番近い映画館がある街が吉祥寺だったんです。

音楽にそこまで熱心でなかった頃は、映画を見たり、公園行ったり、デパートでご飯食べたり、とか。駅前の映画館(吉祥寺オデオン)やバウスシアター、あと、バウスの裏の吉祥寺プラザではアニメをよくやっていたので、「ドラえもん」とかを観ていました。はっきりとした記憶はないんですが、ほかの映画館の記憶がないので、おそらく吉祥寺の映画館がそれくらいになってしまった時期から映画を観始めたんだと思います。

樋口：バウスが、ライブや芝居も一緒にやっていた時代の後の、もっと映画寄りになった頃に通っていた、ということになりますね。

トクマル：そうですね。バウスは映画館として通っていたんです。10代の後半くらいに、いわゆる単館ものに興味を持ち始めて、長時間上映とか何本立てとかを観てました。その印象は強いんです。ずっとバウスにいる、っていう(笑)。長時間いるなーって。なんか、あんまり誰にも咎められない雰囲気があった。



写真:Maciej Komorowski

樋口:80年代のバウスはまだ2スクリーンで、小さい方の「ジャブ50」は、座席がソファだったんですね。だから、寝転びながら映画を観ていた(笑)。ヴィム・ヴェンダースの『さすらい』(1976年)とか、3時間くらいあるのを、ふかふかの長いソファで。そういうのどかな時代。

トクマル:そりゃあのだかですね(笑)。いや、でも、バウスは最後までのだかだった印象ありますね。係りの人たちも他のところと比べてゆるい、というか。あそこで怒られた記憶がない。

樋口:他のところで、怒られたことがあるんですか？

トクマル:いや、しっかりしなきゃいけないじゃないですか、普通の映画館だと。バウスは、優しくしてくれるというか、暖かく見守ってくれる、という感じでしたね。

ユニオン、ワルシャワ、タワー

樋口:映画以外で、吉祥寺についてどんな思い出がありますか？

トクマル:ディスクユニオンとタワーレコードとワルシャワっていうレコード屋があって、特に、ワルシャワによく通っていましたね。いろんな音楽を教えてくれる場所でした。だから吉祥寺に来ると、ユニオン、タワレコ、ワルシャワの3店をまず回る(笑)。なければ新宿や渋谷へ、というパターンです。吉祥寺は渋谷にも新宿にも出やすいし、新宿の西口に行けば怪しいレコード屋さんもいっぱいあって。吉祥寺から両方行けるのが良かったから、常に行き来していた感じがありますね。まず吉祥寺に行って、なかったら渋谷とか新宿とかにいくみたいな。その繰り返し。

樋口:それが10代半ばの頃？

トクマル:そうです。中学生くらいの時から来ていましたね。後は、楽器屋さんも今よりいっぱいあったし。

樋口:ワルシャワなどの吉祥寺のレコード屋で発見したミュージシャンで、どんな人たちがいました？

トクマル:当時流行っていた洋楽インディーズが多いですね。名前挙げられないくらい多いです。渋谷と吉祥寺でほとんどの音楽を手にしていたので。とにかく僕にとってほとんどの音楽はそこらへんから(笑)。



ワルシャワ WARSAWA

1990年10月9日、吉祥寺駅南口すぐのバス通り沿いのビル4階にオープン。NEW WAVE以降の世界の新しい動きの中で、中古レコード、CDの販売と、CDレンタルを行うだけでなく、ワルシャワの夜と名付けられたイベントも開催。90年代、吉祥寺に集う音楽好きの若者たちの聖地でもあった。12年ほどの営業の後、レコード、CDショップは閉店し、同じ場所でイベント・スペース「4th Floor」として活動。パウスシアターの閉館に合わせて2014年に閉店。現在は高円寺に居を移し、「高円寺4th」として活動中。



ディスコユニオン吉祥寺店のオープンは1993年4月24日。オープン当時はメイン、ハードロック、ジャズの3つのフロアに分かれていた。写真はそれから数年後、リニューアル後の店内。

写真提供：ディスコユニオン

樋口：そのころ、音楽の情報はまずどこから得ていたわけですか？
トクマル：まずは……雑誌ですね。ルーツっぽい音楽が好きだったので、コレクター誌みたいなので勉強しつつ。新しい音楽は、当時はカルチャー誌も盛んだったし、音楽誌もいっぱい売っていたし。いろいろな雑誌があって。多分、パンクリバイバルみたいなのと、あと、オルタナが……。カート・コバーンが死んで、イギリスだとブリットポップが流行って、MTVとかスペシャミみたいなMVを流すテレビがすごく盛り上がってきて、裏ではポストロックがジワジワきてて、みたいな時代。それをひたすら追っかけて、名前をちょっとでも聞いたら、レコード屋に行くって置いてあるってパターンで。

セレクトショップ吉祥寺

樋口：レコードからCDへの移行の時代ですよ。レコード屋さんでも試聴が簡単にできるようになっていった。

トクマル：そうですね。ただ、まだ狭間の時代だったので、ジャケット買いをやっていた最後の世代だと思います。今だとスマホで試聴もできちゃいますもんね。当時は、こういう類のジャケットはこういう音楽入ってんだな、っていうのを吉祥寺のレコ屋で学ぶ、っていう。そういう繰り返しでした。

樋口：例えば、最初にユニオンとかワルシャワとかに行った時は

どうでしたか？ タワーは普通の人も行くけれど、このふたつはハードルが高いと思うんですが。

トクマル:そうですね。でも、僕は、パンクとか60年代の音楽を好んで聞いていたので、そういうのがある中古屋、輸入盤がいっぱいあるお店に行こうと思って、いきなりそっちに行ったんですよ。初めてユニオンとかワルシャワとか行った時は相当怖い思いをしました。こんなところで買ったCDを、親に見せられないんじゃないか？って(笑)。いくつかあったレコ屋の中で、一番ヒップというか、最新情報を伝えてくれているお店だった。他にも、今は移転して縮小しちゃったけど、吉祥寺にヴィレッジヴァンガードがきた、ってすごく盛り上がってましたね。そういうところに置いている本や音楽雑誌の記事を読んで、いろいろ知っていった。そういった意味で、吉祥寺はなんでも手に入る街って印象でしたね。渋谷や新宿は本当にはいっぱいあるんだけど、でもそこにたどり着くまでに別のハードルの高さがあった。吉祥寺はセレクトショップみたいなところもあったのかもしれない。街全体がいいところを取ってきている、っていう。

怪しいブッキングビジネス屋

樋口:初めて吉祥寺でライブしたのはどこでした？

トクマル:クレッシュエンドですね。昔はブッキングで儲けようとし

てる怪しい人たちがたくさんいて、高校生たちをなんだか知らないイベントにブッキングして、ブッキング料みたいなことで数万円をとるんですよ。僕らはなんでもいいから吉祥寺のライブハウスに出たかったですけれど、出方がわからないじゃないですか。STAR PINE'S CAFEとか曼荼羅とか、プロのミュージシャンが出演しているところにも一応はデモテープを持っていったりしたんですが、カウンターで「そういうのはやっていない」って言われてしまう。高校生の、コピーバンドだから当たり前ですよ。それで「バンド募集！コピーバンドOK！」みたいなことをやってる人たちにお願いするしかない。

逆に、吉祥寺ではライブをほとんど観たことなかったですね。僕の周りは洋楽志向が多くて、外タレがきたら観に行くっていう感じだったんです。だからライブを観るのは吉祥寺のライブハウスではなく、もうちょっと大きなホールでしたね。

樋口:音楽好きの若者たちが洋楽志向で、ライブを観るのは外タレ中心、ということだったということになると、ライブハウス運営も大変だったってことですね。
トクマル:だから怪しい人たちのブッキングも需要があったんでしょうかね。

クレッシュエンド 写真:Maciej Komorowski



買い食いの街吉祥寺

樋口: バウスが閉館してもう2年くらいが過ぎてしまうのだけど、その他で、なくなってしまって寂しい店とか場所とかありますか？

トクマル: ずっと残っている店の方が少ないですよ。個人的に寂しいのは、タワレコの方が移転してしまったこと、ですかね。寂しい感じ……。いろいろあったなあ……。なんだろうなあ……。何があって何がなくなったんだろう……。 (笑)。ユザワヤ？

樋口: (笑) 結構行ったんですか？

トクマル: 行きましたね、暇つぶしにもなるんで。

樋口: 何を買っていたんですか？

トクマル: そんな買わないですよ。あのビル自体がのんびりしててふらっと入れる感じがよかったです。雰囲気があって良かったです。

樋口: たとえば自転車で吉祥寺に来る時って、どこに止めたりしましたか？

トクマル: 昔はだいぶゆるかったですからね、どこにでも停めました。

樋口: どこにでも止められる街って本当にいいですよ (笑)。

トクマル: いいですよ。本当はよくないんでしょうけど。あの頃は、駅の周辺とかひどかったですよ。普通に自転車の上に段重ねとか。停めてある自転車の上にさらに乗っけてしまう

んですよ (笑)。映画館の横のパチンコ屋のところとか。ハモニカ横丁のところも、昔は全部自転車が置いてあったんですけど、それも一斉になくなってしまいましたね。でも、フリーペーパーの「PARKS vol.0」に載っていた大昔の駅前の写真を見ると、そんな山のような自転車なんてなかったからその当時の景色が戻ったのかな？とも思ったりしますけど (笑)。

樋口: 井の頭公園とかには？

トクマル: よく行きましたね。

樋口: 井の頭公園、案外広いじゃないですか。どのあたりによく行ってました？

トクマル: 僕は端っこで……。井の頭公園駅の方まで行って。なんにもしてなかったですね。単に行っていた、っていうか。行く場所もないから、という理由だったと思うんですけど。どこか行こうって、焼き鳥とか買って端に行く (笑)。

樋口: いい話ですね (笑)。当時よく行っていた食事処とかカフェとかってありましたか？

トクマル: うーん…あまりなかったかもしれないですね。いせやで飲んでる高田渡さんの背中がよく見えましたけど (笑)。僕はお酒も飲まないし、お金もなかったですし、レコード屋に行って、買い食いみたいな。吉祥寺は買い食いの街という印象で (笑)。だから丸井のところから公園までいく通りにコンビニができた時は衝撃でした。こんなありきたりのものを買食いしていいの

か？ この街はどうにかなっちゃうんじゃないか？って。ポジティブとネガティブどっちの意味もあるんですけど。2000年代直前くらいかな……。あの通りもだいぶチェーン店が増えてきちゃいましたね。そしていつのまにか、カフェだらけの街に(笑)。

新しい映画の観方と聞き方を

樋口:最後に映画の話を。映画の音楽を作ることについて。通常の映画音楽って、映画がある程度できてから作るけれど、今回は脚本とも同時進行で音楽もそれに寄り添って作る、というようなやり方でした。

トクマル:企画段階から関われるのって、いいですよ。僕も吉祥寺はある程度は知っているところも多くて、音楽的にも、僕が関われるポイントが多くて、そういう意味では想像が付きやすいし、同時進行でいろんなことを共有できる。自分の思い出とも重ね合わせられるし、思い出になかった吉祥寺の街にも重ね合わせられるし、撮影の始まりから編集の終わりまでにつき合っ、それに合わせてもう一度曲を練り直すっていうことが出来ると思う。それが今回の面白さになるはずですよ。

あと、いろんな人には関わってもらおうと思っているので、個人的にそれが楽しみです。普通の映画音楽って、結構べったりつけちゃうことになることが多いんですが、僕はそういうのは

とっぱらっちゃっていいんじゃないかなと思ってるんです。いろんな人のイメージが、次々に現れる。そういう面白い観方も聞き方も出来るようにしたいですね。

樋口:そこが映画のタイトルにSをつけて複数形にした意味でもあるんですよ。いろんな人の吉祥寺が重なってくれるとうれしい。

トクマル:そうですね。そうなると思います。

樋口:ありがとうございました。

トクマルシューゴ | 様々な楽器や非楽器を用いて作曲・演奏・録音をこなす音楽家。2004年NYのインディレーベルより1stアルバムをリリース、各国のメディアで絶賛を浴びる。以降、国内外ツアーやフェス出演、映画・舞台・CM音楽制作など幅広い分野で活動。2016年4月、両A面シングル「Hikageno / Vektor feat. 明和電機」リリース。現在は来るべきアルバムに向け新プロジェクト進行中。

Hikageno / Vektor feat. 明和電機
[両A面シングルCD+DVD2枚組仕様]発売中
PCD-18811/2 ¥1,800+税



吉祥寺

だけが

住みたい

街でした

マキヒロチ

1



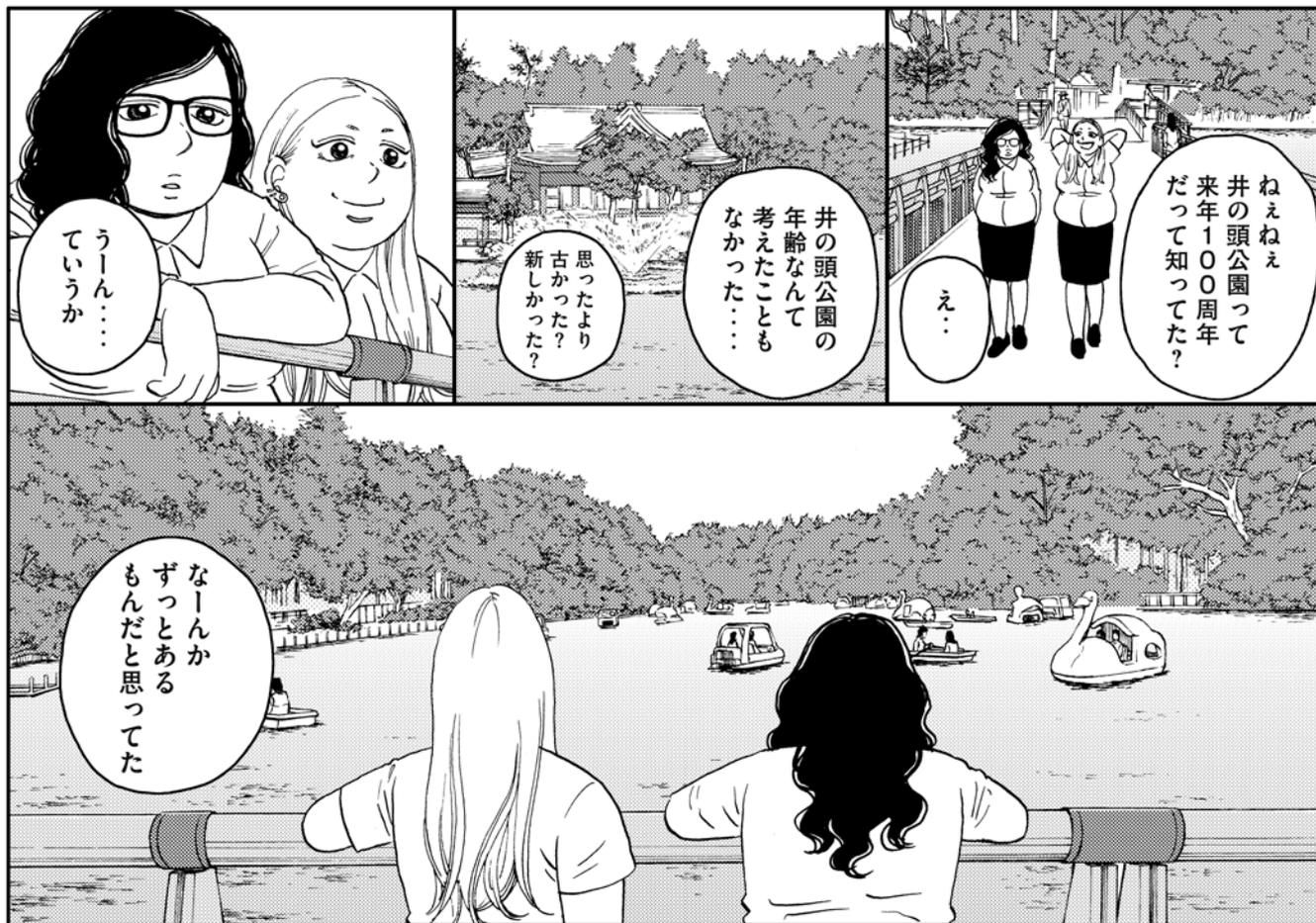
私は小学一年生の時から高校二年生の間、三鷹市の北野というところに住んでいました。そこは三鷹市ではあるけれど、駅でいうと三鷹駅より吉祥寺駅の方が近くて、遠出する時や買い物に行く時はほぼ毎週日曜日はバスで15分ほどかけて吉祥寺に出ていました。私の幼いころの知っている都会といえば吉祥寺で、大好きな漫画が買える、今はなき『まんの森』や、家族でお祝いごとがあると食べに行く季朝園や、お花見もできる井の頭公園がある吉祥寺は私の願いを叶えてくれる街であり、私の大部分を作ってくれた街です。

でも、時が経つにつれて吉祥寺の街は変わりました。私の心の名作として残ってる作品を沢山観たバウスシアターが閉館し、いつも当たり前のようにあると思ってた家具のMIYAKEが閉店。その代わりどこにでもあるようなチェーン店が増え、どんどん風景が変わってしまいました。なんでもある街だけどこかの街に似てるなあ…時々そんな淋しい気持ちもあります。でもそんな時は井の頭公園に向かいます。井の頭公園はずっと変わりません。私が小さい時からずっと同じです。昼も夜も春も冬もいつ行っても変わらず私を迎えてくれます。ああ、やっぱり吉祥寺が大好きだと確認できる大事な場所です。

そんな井の頭公園を中心に、私は大好きな吉祥寺を漫画とコラムで紹介して、再確認し、沢山の吉祥寺を愛する人達と(そうでない人も巻き込んで)一緒に吉祥寺の街と映画「PARKS」を盛り上げていきたいと思います!

マキヒロチ | 冒頭に吉祥寺バウスシアターの閉館の話題が登場するコミック『吉祥寺だけが住みたい街ですか?』の作者。吉祥寺で不動産業を営むにもかかわらず、吉祥寺に住まいを求めてやってくる客たちを吉祥寺の外へと案内する女性を主人公とするこの作品は、そこにある吉祥寺への裏返しへの愛とともに多くの読者の心をとらえ、現在も「ヤングマガジン サード」誌に連載中。その他『いつかティファニーで朝食を』(新潮社)『創太郎の出張ぼっちめし』(新潮社)などがある。

logo design: siun | 小酒井祥悟が2013年4月に設立。「TO magazine」や「& premium」のwebsiteなどをデザイン。



IN CINEMA, IN KICHIJOJI

vol.1



映画の中に出てきた吉祥寺。吉祥寺で撮影された映画。そんな映画の記憶を色々な人に語ってもらおうというリレー企画「IN CINEMA, IN KICHIJOJI」。第一回目は、吉祥寺で生まれ育ったミュージシャンの高田漣さん。現在は中央区に居を構える高田さんは、少し離れた視線で吉祥寺をみつめているようです。映画からみえてくる、移り行く吉祥寺の風景について語ってもらいました。

高田漣 | ミュージシャン

「グーグーだって猫である」

いま、街がどこも均一化しちゃっていますよね。今ぼくが住んでいるあたり、築地の裏側とか月島とかは、子どもの頃に生活していたのと同じ光景が残っているんですよね。あんまり都会は好きではないし、かといって住宅地も苦手で。庶民的な、おじちゃんおばちゃんがいる、駄菓子屋があるような景色が落ち着くんですよね。吉祥寺から離れてもう20年も経ちました。吉祥寺の街はずいぶんと変わってしまったけれど、それでも昔から変わらずお店をつづけているしぶとい人たちがいるのが嬉しいですね。

吉祥寺の街の特徴のひとつに、“独特な文化の匂い”があると思います。音楽家の人たちもすごく多いし、漫画家さんも多いし、アニメーションの人たち、俳優さん、それに映画関係もけっこういらっちゃって。東京も環八より外側は別世界で、“のどか”なんですよ。ゆっくりものを作る時間が流れている気がします。大学のときにつも行っていた飲み屋があって、うちの親父（フォークシンガーの高田渡）もいましたけど、崔洋一監督もよく来られていて。偶然、のちに崔監督の短篇映画の音楽を担当することになって、その飲み屋の話をしたりして。

昔はあの“のどかさ”が“中心”なんだと思っていました。そこから井の頭線で渋谷へ行き、中央線で新宿へ行く。電車だと都心へすぐ行けちゃう。でも、離れて住んでみると、ぼくの住んでいた場所はだいぶ“東京のはずれ”だったんだなあということがわかりました(笑)。

ぼくが思う“吉祥寺らしい音楽”というと、父が昔やっていた「武蔵野タンポポ団」ですね。メンバーも固定でないし、その日いる人だけで演奏しちゃう、みたいな空気には吉祥寺らしさを感じますね。吉祥寺ってみんな“気まま”なんですよね。

たとえば昔、うちの父と母と一緒に演奏旅行に行く為に歩いていたら、たまたまよく知った人とすれ違ったんです。その人は風呂桶もってサンダル履きで銭湯に行こうとしていたんですけど「やあ、高田さん、どこ行くの?」と声をかけてきたので、父が「ここへ行くんだよ」とこたえたら、その格好のまま一緒について来ちゃったんですよ(笑)。そういう、いい意味で自由な、独特な場所でしたね。バウスシアターもそういう雰囲気のある街にある映画館、という感じがあって好きな場所でした。“文化の息抜き場”というか。あれから吉祥寺の街はずいぶんと変わりましたねえ。

「いせや」も建て替えになりましたよね。ずいぶん綺麗になっちゃったなあと思っていたんですが、この間、久々に行ったら、いい感じに^{グッ}出汗が効いてきてヴィンテージ感が増してましたね(笑)。桶とか醤油さしとかは昔のままのものを使っているんですよ。だから残り香があって。そうやってあの頃の吉祥寺が残っていったらうれしいですね。



●武蔵野タンポポ団

70年代前半、吉祥寺のライブハウス“ぐわらん堂”に集まるミュージシャンによって結成されたジャグバンド。当日来た人が演奏するというスタイルで、メンバーは高田渡さんの他に友部正人さん、山本コウタローさんなどがいた。



©2008「グーグーだって猫である」フィルム・コミティ



●映画「グーグーだって猫である」

Blu-ray販売中

発売元:アスマック/販売元:TCエンタテインメント

吉祥寺でロケーションされた映像作品っていうとぼくは、吉祥寺在住の漫画家大島弓子さんが原作で、これも吉祥寺在住の犬童一心さんが監督された『グーグーだって猫である』シリーズを挙げたいです。はじめは映画で、6月からWOWOWのドラマがまた放送中なのですが、僕が音楽を担当させていただいています。映画版のときも細野晴臣さんと一緒に音をつけたりしていました。

映画『グーグーだって猫である』(08年/小泉今日子主演)、WOWOWのドラマ『グーグーだって猫である』(14年/宮沢りえ主演/全4話)『グーグーだって猫である2 -good good the fortune cat-』(16年6月より放送中/宮沢りえ主演)と今回で3回目なのですが、撮るごとにロケをしている吉祥寺の街が変わっていくんですね。もちろん映画版を撮っているときは“今の吉祥寺”としてみていたんです。それが、次のドラマ版になったら「ああ、あそこがなくなっただな」と思って、今度の新版になったら「もう、バウスシアターもないんだ」って。

街って日常に存在していてあたりまえに接しているものだから、特別に気にしていなかったりしますよね。細



●大島弓子「グーグーだって猫である」

「綿の国星」「バナナブレッドのプディング」などの漫画家、大島弓子さんがグーグーを始めとする猫たちとの生活を綴ったエッセイコミック。第12回手塚治虫文化賞短編賞受賞。



●映画「タカダワタル的」

伝説のフォークシンガー高田渡さんの魅力的な世界を記録したドキュメンタリー音楽映画。代表曲「生活の柄」など名演奏の数々や、吉祥寺を歩き、なじみの〈いせや〉で一杯呑み、自宅で酔いつぶれるまでの貴重な姿も。監督はタナダユキさん。

かいところは忘れてしまったりもして。親父を撮ったドキュメンタリー映画『タカダワタル的』(04年/タナダユキ監督)を見ても「ああ、あのおばあちゃんが亡くなったなあ」とか思ったり。街はドラマや人物の背景ではあるんだけど、映像を見ると街のディテールが甦ってくるんですよ。

普段なにげなく街を見ている。でも、実は街が変わっていく瞬間を見ている、撮っているんですよ。今では犬童監督は意識的にそういう場所を選んでロケをされているんです。

ぼくは、そういうふうに刻々と日常が変化して、どんどん失われてゆくことを感慨深く思いながら、吉祥寺で撮られた映画を見えています。

取材／構成：寺岡裕治

高田漣(たかだ・れん) | 1973年生まれ。フォークシンガー高田 渡の長男。14歳からギターを始め17歳でセッションデビュー。マルチ弦楽器奏者としてレコーディングやライブで活躍。ソロアルバムに「Wonderful World」「コーヒーブルース～高田渡を歌う～」など。映画音楽に「横道世之介」(12)「箱入り息子の恋」(13)など。音楽を担当した連続ドラマ「グーグーだって猫である2-good good the fortune cat-」が6月11日よりWOWOWにて放送中。

第一回

吉祥寺の裏方たち

らんかんスタジオ

鈴木育男インタビュー



写真：岡田真沙恵

間もなく創業100年を迎える写真館らんかんスタジオの二代目、鈴木育男さんは、戦前から今に至るまで、吉祥寺という街の変化を写真におさめてきました。一昨年、出版した『うつりゆく吉祥寺』という写真集は、街がどのように発展し、どんな風に人々が生活していたのか、その一辺を伺い知る貴重な資料にもなっています。その写真集と一緒に眺めながら、鈴木さんにお話を伺いました。



1964年(昭和39年)。吉祥寺貨物専用ホーム。

鈴木：僕は昭和10年、4歳の頃から吉祥寺にいます。今から81年前からここにいる訳だ。その頃から、吉祥寺をずっと見て、それを写真におさめてきました。一貫して感じるの、昔から吉祥寺は賑わっていたということ。とは言っても、当時はこの一帯はどこも田舎町で、近くの三鷹も、荻窪や西荻窪だってそうだったんです。ただ吉祥寺は大勢人が来て、活気のある良い町でした。また、吉祥寺駅は、貨物を取り扱う専門のホームがあったんです。まだ駅が地上にあった頃ですね。

——そうすると小、中学生くらいの頃に戦争が始まるわけですが、その頃の記憶は残っていますか？

鈴木：はい。空襲も経験しています。覚えているのは、昭和20年頃、井の頭公園に時限爆弾が落ちたことがありました。すごかったですよ。夜中に空襲警報が鳴ったんで、近隣の方はみんな井の頭公園に避難したんです。そうしたらそこへ落ちたんです。時限爆弾というのは、時間が経つと破裂するんで、その時は落ちただけで、空襲が終わって家へ戻った後に、公園の方からすごい轟音が聞こえた。で、見に行ったら土煙が杉の木の上の方まで立ち昇っていました。その時に池の中にも何発か落ちて、だいぶ鯉が死んだんですって。これはあとから聞いたんですけど、皆はそれをすくって食べたと言っていました。食べるものが何もない時代ですから。戦争が終わるすこし前です。すごい経験をしました。

——そこから戦争が終わって、どのように街は復興してきたのでしょうか？

鈴木：そんなこんなで戦争が終わった頃には、吉祥寺の線路沿いは強制疎開で全部更地になっちゃったわけです。そうしたら、めざとい人たちがいち早く駅の近くの土地をバットおさえて、そこで闇市を始めたんです。闇市と言うのは、配給のルートでは買えないもの、お米とか、麦、小麦粉を始めとして、油やバターなんて他では絶対に売っていなかったようなものがあ

りました。それからアメリカ軍からの横流しだと思うのですが、石鹸からチョコレート、キャンディなんかもあった。特に甘いものには飢えてたから、あそこで買ったチョコレートやヴァンホーテンのココアとかの味は忘れられません。

それから、「ホッケ」という魚は身が締まった美味しい魚ってイメージあるけど、当時は、流通の輸送状況が悪いので、配給された魚なんかはプーンと半腐れの臭いがしてすごかったです。でも、食べるものがないからそれを食べるんです。だから僕は戦後しばらくまで、ホッケというのはそういうものだと思ってました。最近ホッケを食べると「これはホッケじゃないんじゃないか、美味しいぞ」と(笑)。



写真：岡田真沙恵



1957年(昭和32年)。
つばめ通り(現・武蔵通り)。



1965年(昭和40年)。水道道路(現・井の頭通り)。当時自動車は通行禁止だった。

—— 闇市から現在のハモニカ横丁の姿へ変わっていったのはいつ頃なのでしょう？

鈴木: 昭和30年くらいからかな？ 序々になんだけど、闇市が飲み屋横丁に変わってきます。軒並み赤ちょうちんが出てくる。その頃にはもう僕は飲める年頃になってたから、昭和30年、31年ごろはやたらと飲みに行っていました(笑)。その頃から今のハモニカ横丁の姿になっていったと思います。

—— ハモニカ横丁の他にも、吉祥寺って商店街がいっぱいありますね。

鈴木: 基本的に吉祥寺って、商店街の周囲が住宅街なんです。繁華街はわりとこじんまりとし、四方を大通りに囲まれているような感じ。今は中道通りなんかが発展してますけど、その

前から、公園通りと井の頭通り、吉祥寺大通り、五日市街道、あるいは商工会議所前の通り。こうやって大通りで囲まれている所が商店街です。だから吉祥寺は良いんだと思います。コンパクトで。人が回遊するのにちょうど良い大きさで。それから井の頭公園がある。これがまた大きいんですよ。ほっとする所があると。井の頭公園だけは他の街は真似できない。あれは吉祥寺の宝です。大事にしくちやいけな。

—— 近年、街の風景も随分変わってきました。そのことについてはどう思われますか？

鈴木: やっぱ古いものが無くなっていくっていうのはすごく寂しいです。街にあった暖かみが消えてしまうようでね。でも反面、新しくなるとそれなりの良さもあって、利便性というか、食

べるもの着るもの住む所、全て良くなる訳です。だから、特に年をとってくると、便利になる、楽になるというのはすごく助かります。それは単純に良いことだと思います。

また街の発展の面から見ると、よその街との競争、というのがありますから。吉祥寺が、他の街に負けないように、錆つかなないように、いつも活性化していく仕掛け・考えを持った人が集まって、ブラッシュアップして、錆びないようにしてほしいです。



1965年(昭和40年)。水道道路突き当たり。現在はアトレ駐車場になっている。正面ビルは「丸井」。現在はドンキホーテ。

そうすると吉祥寺は、もっともっと、井の頭公園とあいまって、魅力的な街になるんじゃないかと思います。

——ありがとうございます。これからも長生きして吉祥寺の発展を見守って行って下さい。

鈴木: いまも写真は撮り続けているんです。40年後くらいにまた写真集を出そうと思って。皆さんも長生きして出版されるのを待っていて下さい(笑)。

2016年4月29日(金・祝)らかんスタジオ吉祥寺本店にて
写真提供・撮影:らかんスタジオ・鈴木育男
書き起こし:井戸沼紀美 取材/構成:岩井秀世

鈴木育男写真集『うつりゆく吉祥寺』

発行:ぶんしん出版

ISBN:978-4-89390-111-8

AB判/ハードカバー/216ページ/

フルカラー印刷/¥2,500+税



らかんスタジオ

七五三、結婚写真、成人記念写真は
らかんスタジオ吉祥寺本店へ。JR吉祥
寺駅、井の頭線吉祥寺駅から徒歩約3
分。ご予約・お問い合わせは☎0422-
21-2111 (営)10:00AM～6:00PM 武
蔵野市吉祥寺本町1-4-11



井の頭公園 園内放送に注目!



井の頭公園内で日々流れる園内放送。さまざまな注意事項が読み上げられるのですが、なんと、5月半ばからはバンド「相対性理論」のやくしまるえつこさんによるアナウンスが流されているんです。そのバックに流れるのは相対性理論のニューアルバム収録の「弁天様はスピリチュア」。これはバウスシアター閉館後に、相対性理論がバウスをスタジオ代わりにして録音した音源が元になった曲で、当然井の頭公園の弁天様をイメージしながら作られた曲。毎日10時と12時と16時。弁天様あたりではとてもよく聞こえます。歌と現実とが溶け合った、まさにスピリチュアルな空間が出現します。是非一度お試しあれ。

吉祥寺と井の頭公園の思い出の場所、思い出の店舗などの画像データとコメントを、大募集。フリーペーパーや映画『PARKS』のウェブサイトでの掲載、写真展の開催などを考えています。映画館やライブハウス、レコード店、喫茶店などはもちろん、かつてあった吉祥寺のこんな場所、こんな店、こんな人たちが今ここに蘇って、今の吉祥寺をさらに面白くしてくれたらと願っています。

思い出の写真 大募集

✉ parks100@boid-s.com

お名前、連絡先を明記してください。使い方は追って連絡します。

『PARKS』は2017年5月まで、隔月での発行予定の期間限定マガジンです。同名の映画とともに生まれ、ともに語り、ともに成長していきます。この『PARKS』を配置、配布していただける店舗やスペースを募集しています。ご協力願える方、下記までご連絡ください。

『PARKS』 配布のお願い

✉ parks100@boid-s.com

PARKS パークス

瀬田なつき監督作品 音楽監修トクマルシューゴ
2017年春 テアトル新宿他にて全国公開

製作:本田プロモーション BAUS 製作プロダクション:オフィス・シロウズ 配給:boid 宣伝:VALERIA

parks100.jp [fb.com/parks100jp](https://www.facebook.com/parks100jp) [@parks100jp](https://twitter.com/parks100jp)



フリーペーパー『PARKS』1号

2016年6月13日発行

編集 岩井秀世、樋口泰人(boid)

編集協力 中村悠太、井戸沼紀美、柳川幸雄(高円寺4th)、
佐藤雅彦(ディスクユニオン)、小倉聖子(VALERIA)、
田中有紀(boid)

デザイン 中野香

発行 boid www.boid-s.com

東京都新宿区住吉町1-11 OSKビル602 ☎ 03-3356-4003